

小学校通常学級に在籍する軽度発達障害児への 成果活用型・支援環境構築に関する検討

Discussion on establishment supported environment based on the
outcomes for students with mild developmental disabilities
in elementary regular class

障害児教育実践センター 平澤紀子・神野幸雄

障害児教育講座 池谷尚剛

Noriko Hirasawa and Yukio Jinno; Research and Clinical Center for Children with Special Needs
Naotake Iketani; Division of Special Support Education

要 旨

本研究は、特別支援教育体制が異なる岐阜県内の3つの小学校通常学級に在籍する軽度発達障害児3名に対して、学校現場に適合した支援環境を構築するための条件を検討することを目的とした。学校現場における成果の査定に基づいて、成果を活用して課題を解決するための外部支援を実施し、シングルケース・リサーチデザインにより評価した。その結果、変化の幅は異なるが、対象児の行動に望ましい変化がみられた。また、特別支援教育コーディネーターの関与が増加し、その働きが定着する方向への変化が示された。以上の結果を基に、小学校通常学級における軽度発達障害児への支援環境を構築するための外部支援の在り方について考察した。

Key Words : 通常学級, 軽度発達障害児, 支援環境, 特別支援教育コーディネーター

I 問題と目的

文部科学省による「特殊教育」から「特別支援教育」への転換を受けて、小・中学校の通常学級に在籍する軽度発達障害児への支援環境の構築が求められている。ここで言う支援環境の構築とは、対象児への適切な支援を実施するための条件整備を指すが、多様な課題を抱える学校現場においては必ずしも容易なことではない。

そこで、トップダウン式に、学校現場における支援環境の構築を担う特別支援教育コーディネーターを含む校内委員会を設置するような組織的整備が必要である。加えて、ボトムアップ式に、個々の事例から、それぞれの学校現場に必要な条件を明らかにしていく必要があり、むしろ現状の学校現場においては直接的な問題解決に益すると考えられる。

しかしながら、これまでの研究では、軽度発達障害児に必要な支援は検討され始めているものの、その実施に必要な条件はほとんど検討されておらず、それもそれぞれの学校現場に適合した支援環境を構築するための条件は明らかにされていない。

一方、支援の実施に必要な条件として(平澤, 2003), 支援の提供者やそれを取り巻く環境特性との適合性(contextual fit)が重要である(Albin, Lucyshyn, Horner, & Flannery, 1996)。そこで、このような環境条件との適合性を勘案し、平澤・藤原・山本・佐田東・織田(2003)は、現在環境における成果から、支援者の望ましい支援行動を生起させるための条件を整備し、その成果を拡大するモデルを示している。

このような考え方を通常学級に在籍する軽度発達障害児への支援環境の構築に適用すると、学級担任とそれを支える特別支援教育コーディネーターの実施に必要な条件から検討していくことができる。それも、学校現場の成果から、その条件を整備していくことによって、学校現場に適合した支援環境の構築が可能となると考えた。

また、そのための研究方法としては、研究者が実践の主体者である現場教師と協働して、学校現場における具体的な課題を発見し、その解決のための支援を計画・実施・評価するという一連のプロセスを行うコラボレーション・リサーチが妥当である。

そこで本研究では、特別支援教育体制の異なる岐阜県内の3つの小学校通常学級に在籍する軽度発達障害児3名を対象として、対象児に支援を提供する学級担任とそれを支える特別支援教育コーディネーターの成果を活用して課題を解決するための外部支援を実施した評価結果から、学校現場に適合した軽度発達障害児への支援環境を構築するための条件を検討することを目的とした。

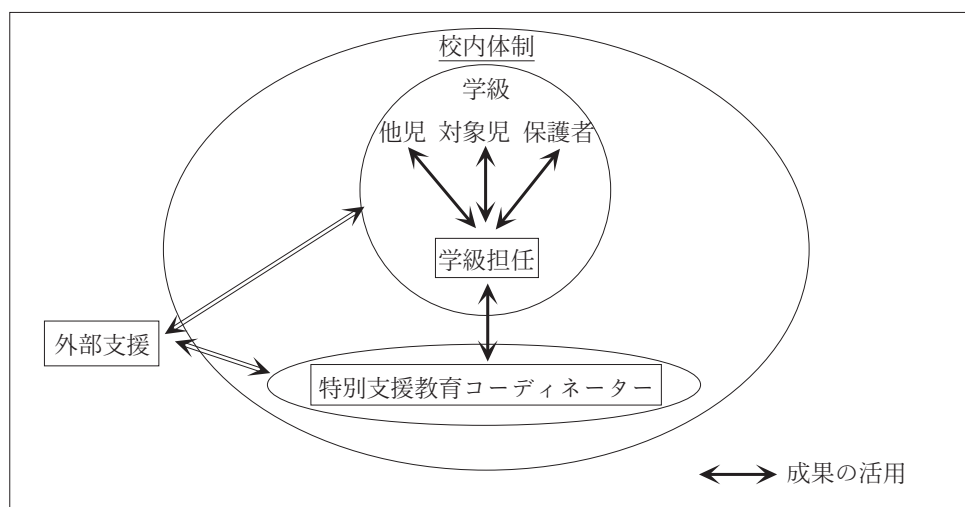


図1 本研究における支援環境の構築

II 方法

1. 対象児

対象児は、特別支援教育体制の異なる岐阜県内の3つの小学校通常学級に在籍する教育上の特別な支援を要する児童3名であった(表1)。対象児の軽度発達障害の実態については、特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議(2003)の通常学級に在籍するLD, ADHD, 高機能自閉症等を想定した調査項目とその基準から査定した。

表1 対象児の実態

事例	性	学年	診断	行動面の困難	調査項目に基づく実態
S1	男子	2	広汎性発達障害	登校しぶり, 学校での参加拒否, 不安定	「対人関係やこだわり等」
S2	男子	4	構音障害	授業中の逸脱, 関心がないと無気力	「不注意」「対人関係やこだわり等」
S3	男子	3	ファロー四徴症	授業中の立ち歩き, 急な発言, 取り組まない	「不注意」, 「多動性-衝動性」, 「対人関係やこだわり等」

<S1の実態>

H16.11より登校を嫌がるようになり, H17.1より不登校や学校での参加の拒否, 不安定さがみられ

た。日常的な会話は可能で、漢字や話し言葉の興味は強く、しりとり、クイズなどの言葉遊びが好きであった。評価される課題は嫌がり参加しようとしなかった。

<S2の実態>

関心のないことには無気力で、支援員がついても授業場面で勝手な行動をした。また、運動会など、皆が関心をもつことに関心を示さなかった。日常的な会話は可能であり、花火を見て、化学組成を言うなど、年齢とは異なることへの関心を示した。

<S3の実態>

授業中の立ち歩き、急な発言や騒ぐ行動を頻繁に示し、また興味がない課題には落ち着いて取り組めなかった。日常会話は可能で、好きな本には時間を忘れて集中できた。心臓の疾患があり、激しい運動は制限されていた。

2. 実施期間・実施場面

平成16年11月～平成17年7月まで、対象児の在籍する小学校で実施した。

3. 学校現場の成果と課題の査定

学校現場における成果を活用して課題を解決するための外部支援を計画するために、表2の項目について学級担任と特別支援教育コーディネーターから、成果と課題となる点を評価してもらった。

また、表3には、その具体的な内容を示した。

表2 学校現場における成果と課題の査定結果

項目／事例	S1	S2	S3
学級担任			
・学級経営	■	■	■
・対象児への支援	■	▲	▲
・支援員との連携	■	■	—
・保護者との連携	■	■	■
・他保護者の理解	■	■	■
特別支援教育 コーディネーター			
・特殊教育の専門性	■	■	■
・事例の把握	■	■	□
・学級担任との連携	■	■	□
・学級担任への相談助言	■	■	□
・保護者への相談助言	■	■	□
・特殊学級との連携	■	■	—
・関係者の連絡調整	■	■	□
・支援方針等の話し合い	■	■	□
・校内委員会の運営	■	□	□
・全校の理解啓発	□	□	□

■成果がある ▲一部成果がある □課題がある

表3 学校現場における成果と課題に関する内容

事例	学級	学級担任		特別支援教育 コーディネーター	課題 外部支援への要望
		対象児	保護者		
S1	児童30名 担任1名 支援員1名	<ul style="list-style-type: none"> ・特殊学級で興味のある活動を取り入れ在校時間が長くなる。 ・学級での給食が苦手なため、特殊学級で調理をしたり、弁当を持参したりすることで1日いられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・支援員との共通理解により保護者に対応している。 ・保護者懇談の際、今の状態が発達のための段階として前向きに捉えるように話す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援教育コーディネーター、担任、言語通級担任で支援方針と分担の確認。 ・特別支援対象児童としている。 ・幼稚園言葉の教室、保健センターと連携。 	<ul style="list-style-type: none"> ・通常学級の意識変化。 ・全校の取り組みとしていく。 ・支援員が時間給で不在の時、特殊学級の他児童の調整で、対象児のニーズに応じた支援が困難。
S2	児童29名 担任1名 支援員1名	<ul style="list-style-type: none"> ・学級の集団授業で、本人の知的興味に応じた働きかけを工夫している。 ・特殊学級で対象児はぐちを話す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者との情報交換。 ・特別支援教育コーディネーターの相談助言。 	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援教育コーディネーターによる担任への相談助言、授業参観、保護者との面談。 	<ul style="list-style-type: none"> ・全校の取り組みとしていく。 ・特別支援教育コーディネーターへの支援。 ・保護者への相談助言。 ・校内委員会への支援。
S3	児童36名 担任1名	<ul style="list-style-type: none"> ・集中できる内容を取り上げている。 ・方法を配慮することでドリル学習、リコーダー練習の取り組みが改善した。 ・好きな本は集中して読むことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・がんばりカードの交換。 ・連絡帳、直接の話など連絡を密にしている。 ・学習や生活の支援など保護者が良く取り組んでいる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・管理職の理解。 ・学級担任の配慮。 ・H16は教務主任が特別支援教育コーディネーターとして学級担任を支援していた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・集団一斉指導での個別の支援が困難。 ・基本的な学習ルール、給食、掃除の当番。 ・保護者への相談助言。 ・特別支援教育コーディネーターが学級に関与できない。

4. 学校現場の成果を活用して課題を解決するための外部支援

前述の査定結果に基づいて、表4のような外部支援を計画し、実施経過に応じて修正した。

<S1における外部支援>

特別支援教育対象児童として、特別支援教育コーディネーターを中心に学級担任、支援員、言語通級担任での支援方針・対応分担により、対象児に必要な支援が実施され、望ましい変容もみられるが、全校の取り組みとして理解されていなかった。

そこで、現在の支援体制と支援成果を活用して、全校の取り組みとして理解してもらうために、校内研修会や教育相談、特別支援教育コーディネーターへの助言を実施した。

<S2における外部支援>

特別支援教育コーディネーター、学級担任、支援員、保護者の連携により、対象児に必要な支援が実施され、望ましい変容もみられるが、校内委員会運営はこれからで、個人的な連携に留まっていた。

そこで、現在の連携と支援成果を活用して、特別支援教育コーディネーターを中心とした適切な支

援を実施するために、校内研修会や教育相談、特別支援教育コーディネーターへの支援を実施した。

<S3における外部支援>

管理職の理解や学級担任の配慮により対象児の望ましい変容も一部みられるが、対象児への支援員はなく、対象児の教育的ニーズに応じるためには学級担任への支援が必要とされた。また新年度からの特別支援教育コーディネーターである特殊学級担任は、学級に関与できずにいた。

そこで、学級の成果を活用して適切な支援を継続するために、学生ボランティアを通じて学級担任への支援を実施した。また、前年度からの情報を提供し、連携の窓口となれるように、特別支援教育コーディネーターを通じた学級担任への連絡や情報提供、担当特殊学級への支援や助言を実施した。

表4 成果を活用して課題を解決するための外部支援

事例	外部支援
S1	目標：全校の取り組みとしての理解 ①特別支援教育コーディネーターへの助言（適時） ②特別支援教育や支援成果を確認する校内研修会への協力（1回） ③対象児・保護者の教育相談への協力（2回）
S2	目標：特別支援教育コーディネーターを中心とした適切な支援の実施 ①特別支援教育や支援成果を確認する校内研修会への協力（3回） ②訪問観察、特別支援教育コーディネーターへの助言（3回） ③対象児・保護者の教育相談への協力（7回） ④特別な支援を要する全児童の実態把握と情報提供（1回） ⑤全校の教育相談への協力（4回）
S3	目標：特別支援教育コーディネーターを連携の窓口とした適切な支援の実施 ①学級担任への学生ボランティアを通じた支援（週1回） ②対象児・保護者の教育相談（5回） ③特別支援教育コーディネーター担当特殊学級への学生ボランティア（週1回） ④特別支援教育コーディネーター担当特殊学級への助言（適時） ⑤特別支援教育コーディネーターを通じた学級担任への情報提供（適時）

5. 研究デザイン

外部支援の効果を査定するために、シングルケース・リサーチデザインを用いて、支援実施前のベースライン（BL）期と支援期における次の行動変化を分析した。

①対象児の行動面の困難や活動参加：学級担任、特別支援教育コーディネーター、学生ボランティアが記録した対象児の各標的行動の生起レベル。

②特別支援教育コーディネーターの役割実施：特別支援教育コーディネーターが評価した特別支援教育コーディネーターの役割実施。

さらに、③研究終了時（H.17.7）に、学級担任と特別支援教育コーディネーターによる次の7項目

の評価から、本研究の社会的妥当性を検討した。(1) 研究の目的の適切さ、(2) 研究の進め方の適切さ、(3) 研究で依頼した記録の負担、(4)実施した支援の適切さ、(5) 対象児の望ましい変容、(6) 担当にとっての良い結果、(7) 校内体制の望ましい変容、(8) 保護者の望ましい変容、の5段階評価。

6. 説明と同意

対象児の保護者、学級担任、特別支援教育コーディネーター、管理職に対して、文書により、①研究の目的、②進め方、③協力の自由、④個人情報の保護、⑤データの管理、⑥成果の公開、⑦結果の告知等を説明し、研究協力の同意を得た。

III 結果

1. 対象児の行動面の困難や活動参加の変化について

図2-1～図2-3に、対象児の標的行動の変化を示した。変化の幅に違いはあるが、S1では学校生活の時間や参加レベルが増加し、S2～S3では行動面の困難に減少あるいは減少傾向がみられた。

<S1の行動変化>

図2-1に、S1の学校における参加時間と参加レベルの変化を示した。参加レベルの定義は[0：体調不良の欠席、早退、遅刻、1：家庭で情緒不安、登校しぶり、2：学校には来るが、活動参加は拒否的、不安定、3：本人に合わせた参加（特殊学級、言語通級）、4：本人の主体的な参加（特殊、言語）、5：通常学級の活動に参加]として、記録された。

BL期における登校しぶり、家庭での情緒不安、学校での拒否、不安定の状態から、参加時間が増加し、特殊学級で本人に合わせた過ごし方から、主体的な参加、通常学級への参加への変化がみられた。

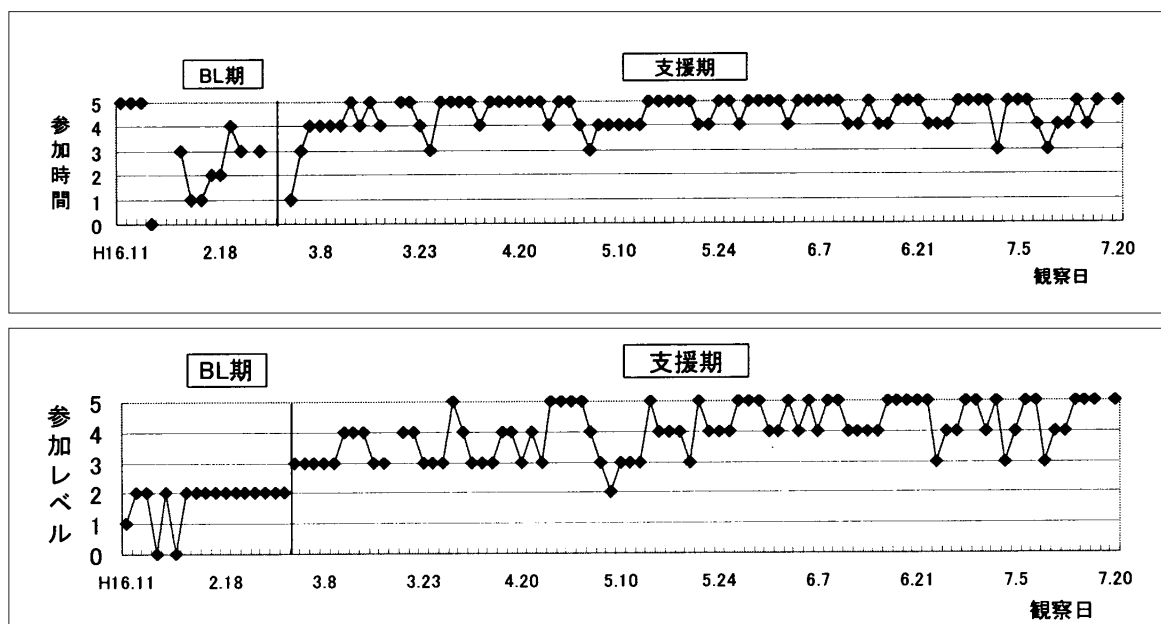


図2-1 S1における学校生活の参加時間と参加レベルの変容

<S2の行動変化>

図2-2に、S2の算数場面におけるコンパスで遊び、ノートに落書き、練習問題をやろうとしない行動と、全校集会における周りの子にしゃべりかけて話を聞かない行動の生起レベルを示した。平成17年度に入ると、いずれの場面でも、逸脱行動に減少がみられた。

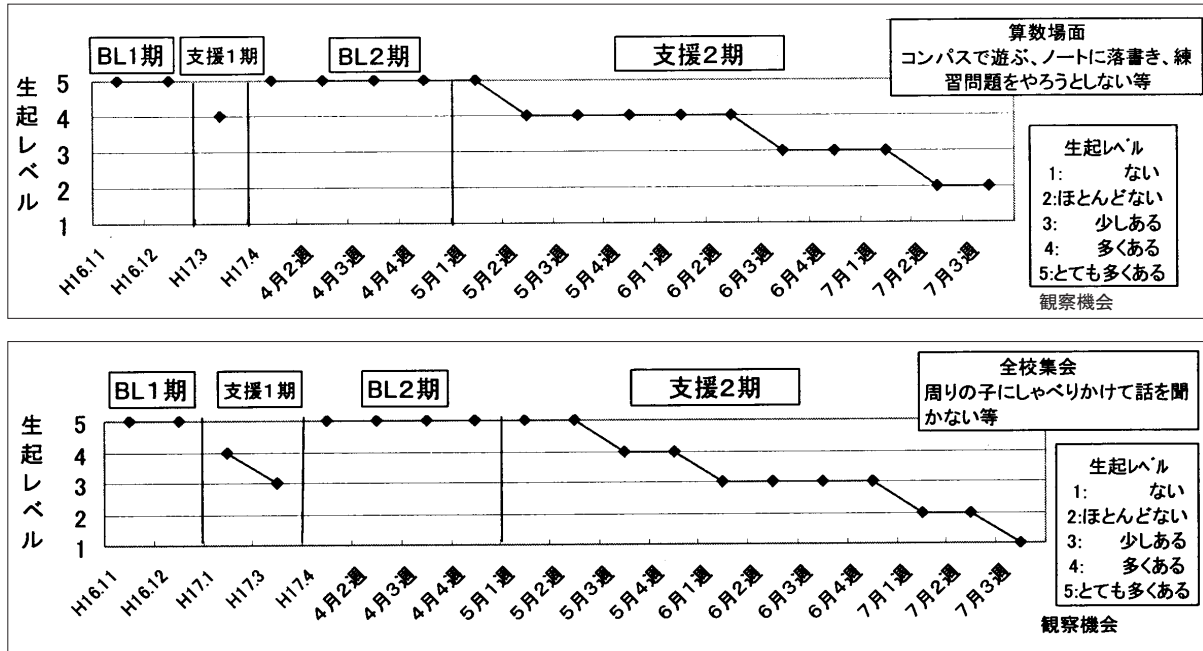


図2-2 S2の算数場面と全校集会における逸脱行動の生起レベルの変容

<S3の行動変化>

図2-3に、S3の行動変化を示した。立ち歩き、急な発言・騒ぐの生起レベルの定義は[1：生起しない，2：未遂，3：自分で止める，4：促して止める，5：促して止めず他の逸脱に発展]であった。取り組みの生起レベルは[1：取り組まず逸脱，2：取り組まない，3：促して取り組む，4：自分で他のことをする，5：自分で取り組む]であった。立ち歩きや、急な発言・騒ぐは減少傾向を示し、取り組みは自分で他のことをするの増加がみられた。

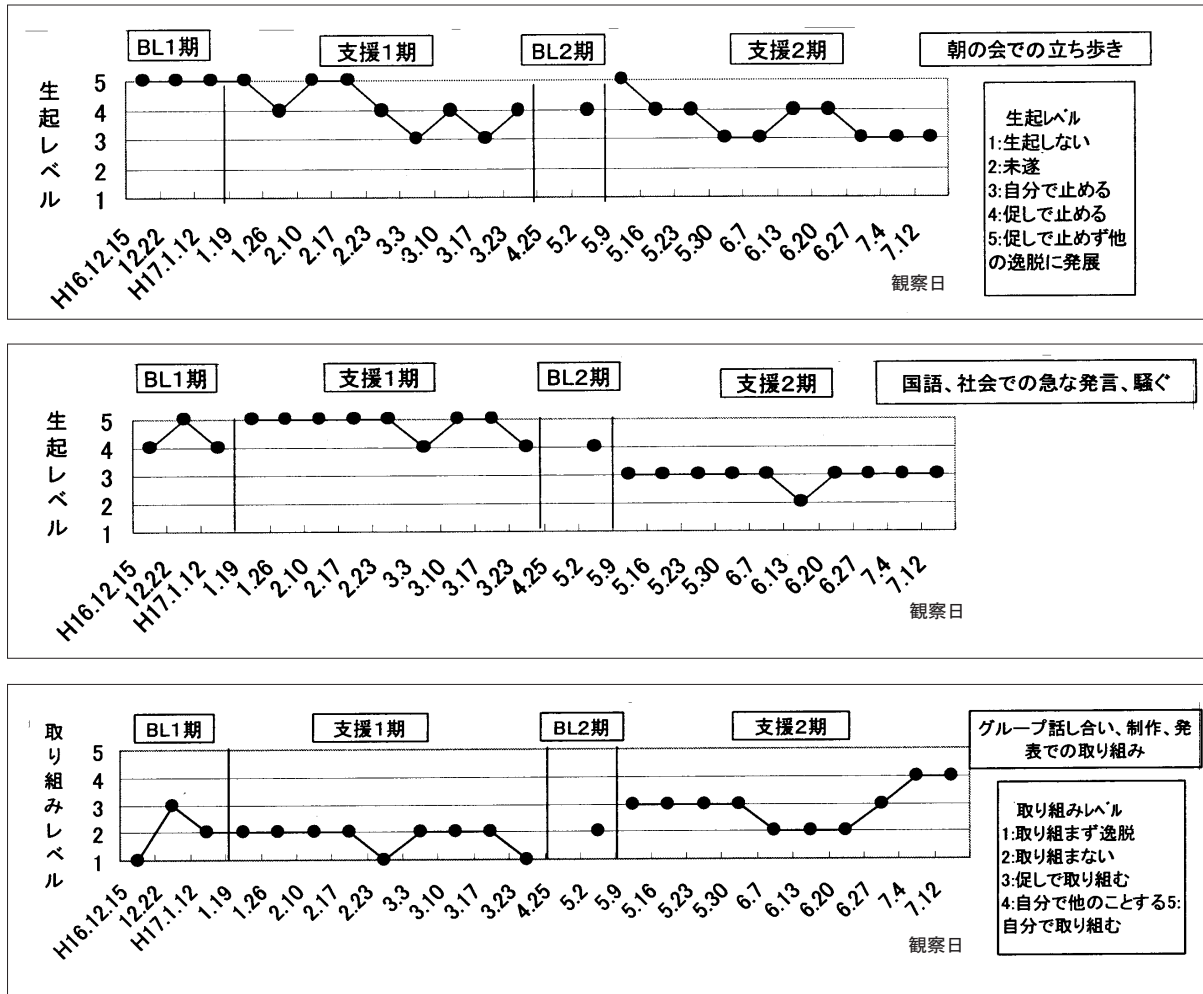


図2-3 S3の各場面における立ち歩き，急な発言，取り組みの変容

2. 特別支援教育コーディネーターの役割実施の変化について

表5に、研究終了時における特別支援教育コーディネーターの評価に基づく役割実施の変化を示した。変化の幅は異なるが、共通して課題があった項目、特別支援教育コーディネーターへの支援における望ましい変化がみられた。各事例では、S1では全校の理解、S2では校内委員会の運営や全校の理解、S3では学級担任との連携に望ましい変化がみられた。一方、聞き取り調査から、特別支援教育コーディネーターの役割実施にかかわる条件として、担当特殊学級の状況、全体把握・校内外の連絡調整を職務とする教頭や教務主任の配慮や連携が挙げられた。

表5 特別支援教育コーディネーターの役割実施の変化

項目/事例	S1		S2		S3	
	事前	事後	事前	事後	事前	事後
・特殊教育の専門性	■	■	■		■	
・事例の把握	■	■	■		□	◇
・学級担任との連携	■	■	■		□	◆
・学級担任への相談助言	■	■	■		□	◆
・保護者への相談助言	■	■	■		□	◆
・特殊学級との連携	■	■	■		-	-
・関係者の連絡調整	■	■	■		□	◇
・支援方針等の話し合い	■	■	■		□	◇
・校内委員会の運営	■	■	□	◆	□	◇
・全校の取り組みの理解	□	◆	□	◆	□	◇

事前：■成果がある □課題がある
 事後：◆望ましい変化あり ◇望ましい変化なし

3. 社会的妥当性に関する評価

表6に、研究終了時における特別支援教育コーディネーターと学級担任による社会的妥当性の評価結果を示した。

表6 社会的妥当性の評価結果

	S1		S2		S3	
	特	学	特	学	特	学
研究目的の適切さ	5	5	5	4	5	
研究の進め方の適切さ	4	4	4	4	5	
お願いした記録の負担	4	4	4	1	-	
大学の助言、支援の適切さ	5	5	5	4	4	
対象児の望ましい変容	4	5	5	1	-	
担当にとって良かったこと	5	5	5	4	-	
校内体制の望ましい変容	4	4	4	3	3	
保護者の望ましい変容	5	5	5	4	-	

1：まったくない～5：とてもある
 学：学級担任 特：特別支援教育コーディネーター

全般的に、研究の目的、進め方、大学の支援助言は4以上の肯定的な評価を得た。各事例では、特別支援教育コーディネーターを中心とした適切な支援の実施がなされたS1とS2では、いずれも4以上の肯定的な評価を得た。一方、特別支援教育コーディネーターを窓口とした支援を進めたS3では、

学級担任から対象児の望ましい変容はないとされ、依頼した記録の負担は適切でなかったとされた。

V 考察

本研究では、特別支援教育体制が異なる岐阜県内の3つの小学校通常学級に在籍する軽度発達障害児3名に対して、学校現場における学級担任や特別支援教育コーディネーターの成果を活用して課題を解決するための外部支援を実施した。シングルケース・リサーチデザインによる評価結果から、変化の幅は異なるが、いずれも対象児の行動に望ましい変化がみられた。また、特別支援教育コーディネーターについても、特別支援教育コーディネーターの関与が増加したり、その働きが定着する方向への変化が示された。

このような結果を得るために、実施された外部支援は、対象児の教育的ニーズや現在環境の成果に応じて異なるものの、共通して特別支援教育コーディネーターへの支援であった。それは、全校の理解や校内委員会の運営、事例検討会や連絡・情報提供など、特別支援教育コーディネーターの役割実施を支援することから、その役割を果たすための基盤となる助言や担当特殊学級の支援であった。とくに、聞き取り結果からは、特殊学級担任の専門性を生かして学級担任を支援していくためには、担当特殊学級の状況に応じた支援や全体把握や連絡調整を担う職務からの支援を体制として確立していく必要があると考えられる。

社会的妥当性の評価結果からは、上記のような条件整備とともに、対象児への適切な支援とその実施者への強化条件を校内に配置することが重要であることが伺われる。例えば、既に支援成果が実現されていたS1やS2では、その支援成果の意味を関係者に確認することで、その実施が継続され、したがって成果も進展し、その成果も評価された。一方、校内におけるそうした条件整備が不足したS3では、対象児の客観的变化はそのまま学級担任の認知する望ましい変化とはならなかった。

以上の結果から、大学のような外部機関が学校現場の特別支援教育を支援する場合、対象児への適切な支援を明らかにするだけでなく、その支援を学校現場において実施するための条件を整備することが重要であると言える。また、その条件は、支援の提供者である学級担任の実施条件とそれを支える特別支援教育コーディネーターの役割実施にかかわる条件として明らかにしていくことができる。

とくに、特別支援教育コーディネーターの役割は、これまで学級担任の支援で完結することが多かった学校現場における新たな仕組みである。本研究の結果からは、特殊学級担任の専門性を生かしていくためには、①事例への関与の機会をつくる、②担当特殊学級の状況に応じた支援、③特別支援教育コーディネーターに求められる連絡調整を職務とする教頭や教務主任との連携を支援していく必要があると言えよう。

現在、外部機関からの専門家チームや専門相談支援員を活用し、小・中学校の特別支援教育を推進する方向である。本研究の結果からは、外部支援を一律に導入しても、その実施に必要な条件が考慮されなければ、期待される成果が実現されないことが伺える。とくに、学校現場の支援資源を活用しようとするならば、支援の提供者である学級担任やそれを支える特別支援教育コーディネーターの成果を活用した外部支援の在り方が重要であろう。今後は、校内における支援者の望ましい支援行動の維持も含めて、学校現場における成果を発展させる成果拡大型の条件についても検討していく必要がある。

謝辞

本報は、平成16年度岐阜大学活性化経費（研究）を受けて行われた研究の一部をまとめたものです。貴重な実践の機会をいただいた対象児童、保護者、関係の皆様には感謝いたします。郡上市立H小学校の林哲治先生、末松和子先生、伊地田真由美先生、松山紀子先生、大野町立K小学校の森永恵先生、森本美穂先生、杉原佐栄先生、岐阜市立N小学校の稲葉恵美先生、村瀬三保先生、服部美樹先生には

共同研究にご協力をいただきました。また、本研究を進めるにあたり、教育学部養護学校教育養成課程4年の別所邦彦さん、奥村洋可さん、神谷真理さんに教育ボランティアやデータ収集に協力いただきました。

引用文献

- 1) Albin, R. W., Lucyshyn, J. M., Horner, R. H., & Flannery, K. B. (1996) Contextual fit for behavioral support plans: A model for "goodness of fit". In L. K. Koegel, R. L. Koegel, & G. Dunlap (Eds.), *Positive behavioral support: Including people with difficult behavior in the community*, 81-98. Paul H. Brookes Publishing Co., Baltimore, .
- 2) 平澤紀子 (2003) 積極的行動支援 (Positive Behavioral Support) の最近の動向－日常場面の効果的な支援の観点から－. 特殊教育学研究, 41(1), 37-43.
- 3) 平澤紀子・藤原義博・山本淳一・佐田東彰・織田智志 (2003)教育・福祉現場における積極的行動支援の確実な成果の実現に関する検討. 行動分析学研究, 18(2), 108-109.

参考文献

- 1) 中央教育審議会 (2005) 特別支援教育を推進するための制度の在り方について (答申).
- 2) 特別支援教育の在り方に関する調査研究協力者会議 (2003) 今後の特別支援教育の在り方について (最終報告).

編 集 委 員
(Editors)

根 岸 泰 子 (NEGISHI Yasuko)	小 林 月 子 (KOBAYASHI Tukiko)	畑 田 一 幸 (HATADA Kazuyuki)
尾 崎 浩 巳 (OZAKI Hiromi)	青 柳 孝 洋 (AOYAGI Takahiro)	佐 藤 昌 宏 (SATO Masahiro)
杉 森 弘 幸 (SUGIMORI Hiroyuki)	江 馬 諭 (EMA Satoshi)	馬 路 泰 藏 (MAJI Taizo)
伊 藤 徳一郎 (ITO Tokuichiro)	山 崎 捨 夫 (YAMAZAKI Suteo)	廣 畠 忍 (HIROSHIMA Shinobu)
緒 賀 聡 (OGA Satoshi)		

© 岐阜大学教育学部研究報告の著作権は岐阜大学教育学部紀要委員会に属する。

岐阜大学教育学部研究報告 =人文科学= 第54巻 第2号

2006年2月発行 [非売品]

岐阜市柳戸1番1

編集兼
発行者 岐阜大学教育学部

責任者 小 林 月 子

印刷所 昭 和 ふ り ん と

岐阜市岩崎1の12の3

ANNUAL REPORT OF THE FACULTY OF
EDUCATION, GIFU UNIVERSITY
(HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCE)
Vol. 54, No.2 (2006)

CONTENTS

NEGISHI Yasuko : Research on Japanese Naturalism from the viewpoint of gender —Focusing on MIZUNO Senko's early works—	1
YAMADA Toshihiro : To read correctly stories in <i>Kokugo</i> textbooks with grammatical concept "Tense" and "Aspect"	11
KOBAYASHI Tsukiko and TAKUSAGAWA Yusuke : How to Choose A Group Home to Live in	21
MATSUNAGA Yosuke : How to Treat Recognition of Sounds in Japanese Primary School Adjust the focus of analysis to school textbook for 6 to 7 ages	39
TANI Yoshio : Classical Elements in Woodwork Design(1) —Wood Turning and Articulated Forms—	53
NOMURA Yukihiro : A Study on the Artists in Guise (I)	63
TERASIMA Takayosi : "Three Tasks" and "Three Dangers" of English Teachers (1)	71
HARADA Nobuyuki : A Study on the "Hentig-Curriculum" as an inter-disciplinary and integrated Type of Curriculum in Baden-Wurttemberg, the Federal Republic of Germany	91
YOSHIDA Kazuko : Population Reduction Society and Gender-equal Society —The Subject to <Work • Family • Balance>—	107
YOKOTA Kaori and TACHIBANA Yoshiharu : On the relationship between the level of aggression motive and the social information processing among junior high school pupils	117
FUJIWARA Yuko and TANIZAKI Tsuyoshi : A Study on Attitudes toward Facilities for Mental Retardation (2) Comparison between Parents, Teachers and Workshop Staffs	127
YABASE Toru : The Intellectual History of "Jeu" —Genet's <i>Le Balcon</i>	137
HIRASAWA Noriko, JINNO Yukio and IKETANI Naotake : Discussion on establishment supported environment based on the outcomes for students with mild developmental disabilities in elementary regular class	147